

スコットランドの学校教育における 音楽レッスンをめぐる諸問題

高松 晃子

Some Issues on Music Tuition in Scottish Schools.

TAKAMATSU, Akiko

要旨

本稿は、スコットランドの義務教育における「音楽」カリキュラムに焦点を当て、学校で実施されてきた無料の音楽レッスンの有料化が引き起こす問題と、その根底にある構造的矛盾を明らかにする。まず、学校で行われる音楽レッスンを担う2つの組織とレッスンの実施形態を紹介する。次に、「音楽」カリキュラムが要求する、2つの楽器または1つの楽器と声楽の演奏能力に注目する。この能力は、義務教育修了資格試験や大学入学資格試験においても測られる。これらの準備にはレッスンが不可欠だが、国がそれをカリキュラムの外にあると認識しているため、レッスン費を負担して講師を学校に派遣するのはもっぱら自治体の役目となっている。この構造的矛盾が音楽レッスンの有料化を容認し、2010年代末にはレッスン受講生の数が大きく落ち込んだ。経済的な理由で音楽を選択しない子どもが増えれば、将来的にはスコットランドの音楽文化全体の衰退が懸念される。

キーワード

スコットランド、義務教育、音楽、レッスン、SQA（スコットランド資格付与機構）

Abstract

This paper tries to examine some problems caused by charging or raising the charges for music tuition in Scottish primary and secondary schools, and to point out the structural inconsistency between "music education" offered by school teachers and "music tuition" by instructors sent from IMS (Instrumental Music Services). Music tuition in Scottish schools has been offered by two organizations located in every Local Authority: IMS, mentioned above, and Youth Music Initiative (YMI). Children and young people can take individual or group music lessons during or after classes, mostly free of charge. Music-tuition classes benefit those who take music courses where performing skills in two musical instruments, or one instrument and vocal, are prescribed in curriculum. They also help those who wish to sit for the National Qualification examinations in music, for a course completion and for admittance to higher education.

However, the Scottish Authority's view on music tuition is that it is an additional and discretionary service by instructors, not a part of the standard educational curriculum delivered by teachers. This structural inconsistency has allowed the Scottish Authority to leave the whole decision-making process to local authorities, resulting in the reluctant budget-cuts. If more children and young people give up taking music lessons for economical reasons, it would result in concerns that the whole music culture of Scotland could decline in the future.

Key words

Scotland, compulsory education, music, music tuition, SQA (Scottish Qualifications Authority)

0. はじめに

0-1. 問題の所在

2018年11月、スコットランド自治政府の「教育技能委員会 Education and Skills Committee」が公立の初等中等学校で音楽実技のレッスン（以下、レッスンと表記）を受けている児童・生徒数を調査したところ、前年から1200人減少していることが明らかになった。具体的な数字で言うと、61615人から60326人に落ち込んだ⁽¹⁾。その原因はレッスンの有料化や値上げ、あるいは予算削減によるサービス低下にあると考えられるという (BBC News 2018)。

独自の教育制度を持つスコットランド⁽²⁾には、義務教育の間、学校で音楽のレッスンを受けられるサービスがある。原則無料で実施されていたこのサービスが課金されることで、低所得世帯の子どもが弾かれてゆくことは想像できるが、問題はそれだけではない。スコットランドの学校における音楽レッスンは単なる課外活動ではなく、教育カリキュラムの目的の達成や義務教育修了資格、大学入学資格の取得と大きく関わっている。つまり、レッスン費を払ってレッスンを受けられるかどうか将来の進路に影響するだけでなく、義務教育の目標達成すらも左右することになりかねない。にもかかわらず、レッスンはカ

* 聖徳大学音楽学部音楽学科・教授

リキュラムを補強するという位置付けにすぎず、しかもレッスンの運用や料金体系の設定は完全に自治体任せになっているため、予算削減の対象になりやすい。レッスン費の徴収と受講生の減少の問題は、この構造的な瑕疵を見直さない限り、根本的な解決には至らないと考えられる。そこで本稿では、スコットランドの学校教育における教科「音楽」を対象に、「カリキュラムが要求している内容がカリキュラムの外で行われる」ことを「構造的矛盾」と呼び、それがどのように発生し、どのような問題を引き起こしているかを具体的に明らかにする。

0-2. 先行研究

「カリキュラムが要求している内容がカリキュラムの外で行われる」という構造的矛盾とその影響を考えるためには、少なくとも、(1) 学校におけるレッスン提供の仕組み、(2) 教育カリキュラムとレッスンの関係、(3) 資格試験とレッスンの関係、を理解する必要がある。これらに関係のある先行研究や資料は、おおよそ以下のように整理することができる。

まず (1) 関連であるが、学校で行われるレッスンのあらましに関してはスコットランド議会のホームページ (Scottish Government 2003) で知ることができる。学校にレッスンを提供している自治体の器楽サービス (器楽だけでなく声楽のレッスンも行っている。Instrumental Music Services、以下IMSと表記) およびその実践と成果については、地方自治体の活動をモニタリングしている政府の調査機関「改善サービス」(Improvement Service) が2013年から年1回刊行している調査報告書に詳しい (たとえば Improvement Services 2019b)。IMSのレッスンとは別に、楽器への最初のアクセスを提供する重要な取り組みであるユース・ミュージック・イニシアティブ (Youth Music Initiative) 制度については、毎年報告書 (たとえば Creative Scotland 2017) や年間計画書 (たとえば Creative Scotland 2019) が参考になる。学校でのレッスンの問題点についてはストラスカイド大学の教員による調査研究 (Moscardini 2015) や、音楽教育協力グループ (Music Education Partnership Group) の調査報告書 (MEPG 2019) が詳細に報告している。

上の (2) のうち、教育カリキュラムについてはスコットランド政府によるドキュメントが豊富である。2010年から施行されているスコットランドの教育カリキュラムは「卓越へのカリキュラム」(Curriculum for Excellence、以下CfEと表記) と呼ばれ、スコットランド政府のホームページに非常に詳しい情報提供がなされているが、日本語で書かれた研究は森川 2013が唯一と言ってよい。本稿が注目するカリキュラムとレッスンの関係に関する研究は、他の言語のものも含めて全く見当たらなかった。

上の (3)、すなわち義務教育修了資格試験や大学入学資格試

験として機能するスコットランド資格機構 (Scottish Qualification Authority、以下SQA) のナショナル資格に関しては森川 2013に記載があるが、音楽の資格については言及がなく、他にまとまった研究が見出せないため、SQAのホームページ (<https://www.sqa.org.uk/sqa/70972.html#countrySelectionOptions>) や受験参考書の類 (Finnerty 2017など) に頼ることになる。

1. 学校で行われる音楽実技レッスン

1-1. Instrumental Music Services (IMS) によるレッスン

スコットランドの学校における音楽実技レッスンは、1960年代から1970年代にかけて先進的な自治体によって開始され (Scottish Government 2003)、現在ではスコットランド全32の自治体で実施されている。音楽レッスンが全国規模で行われるようになったきっかけは、スコットランドが伝統的に音楽の盛んな地域柄であったことに加えて、後述するように、ナショナルレベルで定められた学校教育カリキュラムに楽器演奏が明文化されたことである。

レッスンは、各自治体に置かれているIMSにより運用されている。IMSはそれぞれの学校の実態に合わせて講師を派遣し、基本的に週1回、希望者に対して25~30分程度の個人レッスンあるいはグループレッスンを実施する。自治体や学校の多くは、個人レッスンに加えてアンサンブルや校外での音楽活動の場を用意し、受講生の経験を増やすよう積極的な働きかけをしている。

レッスンの種目は多様性に富んでいる。各自治体が2018/2019年に実施しているレッスン種目を見ると (Improvement Service 2018: 20-23)、中心は西洋楽器で、ほとんどの自治体が弦楽器 (32/32自治体中、以下同じ)、管楽器 (木管と金管両方) (32/32)、打楽器 (ドラム含む) (30/32) のレッスンを実施しているほか、ギター (26/32)、バグパイプ (23/32) も熱心に教えられていることがわかる。ピアノ/キーボードのレッスンを実施しているのは半数程度 (17/32)、ヴォーカルのレッスンは半数をやや下回る (13/32)。アコーディオン、フィドル、クラールサッハ (ハーブ) といったスコットランドの伝統楽器を教えている自治体も10ほど確認できた。フィドルの伝統が続くシェトランド諸島 Shetland Islands ではアコーディオンとフィドルのレッスンを、ゲール語話者の残るアイリーン・シアー Eilean Siarでは、初等学校1年生からゲール語歌唱のレッスンを実施するなど、地域性を生かした特色あるレッスンを提供する自治体もある。

1-2. Youth Music Initiative (YMI) による無料の導入レッスン

IMSのレッスンに加えて学校音楽レッスンにおいて注目すべきは、ユース・ミュージック・イニシアティブ (YMI, 2003年

開始)という制度である。これは、スコットランド政府の業務委託機関である「クリエイティブ・スコットランドCreative Scotland」が「国営宝くじNational Lottery」から資金提供を受け、各自治体に補助金を出して学校内外の音楽活動を活性化させる制度である。つまり、自治体を実施するIMSとは異なりナショナルレベルで実施されている事業であり、これは「教育」と見なされている。このことは、YMIの2019-20年度計画書の冒頭部分の「ユース・ミュージック・イニシアティブは、スコットランド政府の音楽教育 (education) プログラムです」という記述にはっきりと示されている (Creative Scotland 2019: 4)。

YMIが支援するのは大きく校内活動と校外活動とに分かれる。校内活動は、初等教育期間中の全ての子どもに対して、1年間に12時間分のレッスンを無料で提供する取り組みであり、これは自治体レベルで提供されるIMSレッスンのスタートアップまたはそれを補完するものとして大きな意味をもつ。2019年現在、YMIの期間限定無料レッスンはスコットランドの全ての自治体において実現されている。

2. 学校教育カリキュラムにおける楽器演奏の位置付け

冒頭で述べたように、学校における音楽レッスンは単なる課外活動ではなく、スコットランドの教育カリキュラムと深い関係がある。カリキュラムを概観する前に、まずはスコットランドの学校教育の大枠を示しておこう。スコットランドの義務教育は、5歳から始まる初等教育の7年間と中等教育の4年間で行われ、大学に進学したい場合はさらに2年間、中等学校で教育を受けることができる。11年間の義務教育期間は一般教育課程 (Broad General Education Phase、通称BGEフェイズ) と呼ばれ、大学進学準備あるいは職業訓練のための2年間は後期中等課程 (Senior Phase、シニア・フェイズ) と呼ばれる。

未就学の3歳から18歳までの教育は、2010年8月 (この年は初等学校全学年と中等学校1年生のみ) より、「卓越へのカリキュラム (CfE)」に則って実施されている。CfEの究極的な目標は、全ての子どもが①成功した学習者、②自信に満ちた個人、③責任を果たす市民、④効果的な貢献者となることであり、これらへの到達度が次の8つの領域 (curriculum areas) において展開される教育の指標となっている。8つの領域とは、表現芸術 (expressive arts)、健康と福祉 (health and wellbeing)、言語 (languages)、数学 (mathematics)、宗教と倫理 (religious and moral studies)、自然科学 (sciences)、社会 (social studies)、技術 (technologies) で、音楽は美術 (art and design)、ダンス (dance)、演劇 (drama) とともに表現芸術領域を構成している。

スコットランド教育庁は、CfEを具体的に説明する3つの資料を公開している。ひとつは「理念と実践Principles and Practice」(Education Scotland 2016a) で、これは標題のお

りCfEの基本的な考え方を示したものである。2つ目は「経験とその結果 (Experiences and Outcomes、通称Es+Os)」(Education Scotland 2016b) で、ここにはそれぞれの段階 (BGEフェイズで行われる教育は4つの段階に分かれている) で目標とすべき到達点が示されている。3つ目は「ベンチマーク (Benchmarks)」(Education Scotland 2017) で、それぞれの段階で何がどこまでできるようになるかを具体的に示している。Es+Osならびにベンチマークは大きな8つの領域の中の下位分類=教科ごとに記されており、「音楽」は表現芸術領域の中の1つの教科として独立して提示されている。

Es+Osの「音楽」の序文は、音楽を「創造性を豊かにし、創意工夫に満ちた豊かな機会」であると規定し (Education Scotland 2016b: 9)、CfEが理想とする音楽教育の3本柱が「演奏」「創造」「理解」であることを明確に示している。続きを引用しよう (下線は筆者による)。

全ての学習者にとって、活動の主軸となるのは演奏と音楽創造である。これらの活動をとおして学習者は声楽や器楽のスキルを向上させ、響きや技法を様々に探求し、想像力を働かせてアイデアを生み出したり、運用能力を用いて音楽を創造したりする。また、演奏を聴いて評価することにより理解力が向上し、さらに音楽が楽しめるようになる (Education Scotland 2016b: 9)。

Es+Os及びベンチマークは、CfEが適用される義務教育期間の音楽教育において一貫して「演奏」「創造」「理解」の3点を柱に据え、個人の技量を高めて音楽の理解を深めれば、音楽を一層楽しめるようになる、という姿勢を明確に打ち出している。義務教育が終了する16歳の時点で身につけているべき音楽の能力のうち、「演奏」に関わる部分は以下のように非常に具体的である。「一人で正確に、少なくとも2つの対照的な様式の音楽を2つの楽器または1つの楽器と声で演奏し、ABRSMのグレード1級⁽³⁾の標準的なレベル相当の成果を上げること」(Education Scotland 2016b: 9-10)。カリキュラムでここまで規定されていると学校の音楽教員だけでは指導が追いつかず、外部講師に頼らざるを得ない。学校の中でレッスンが実施される理由の一つには、以上のようなカリキュラムの要求がある。

3. 義務教育修了資格試験における楽器演奏の位置付け

3-1. スコットランドの資格体系

2において、学校でレッスン機会を提供する理由のひとつとして、学校の音楽教育カリキュラムが「演奏」能力の向上を謳っていることを指摘したが、別の理由として、それが義務教育の修了資格や大学入学資格試験と密接に結びついていることが挙げられる。ここでは、義務教育修了資格として要求される楽器

演奏能力について述べる。

前述したように、義務教育が終了する16歳の時点で演奏に関して要求されているのは、「2つの楽器または1つの楽器と声で、少なくとも2つ以上の対照的な様式の音楽を、自信を持って正確に、ソロで演奏する」能力であり、中等教育修了時にはこの到達点に達しているかどうかは測られることになる。

まず、「スコットランドで義務教育を修了する」ことについて、そのあらましを述べる必要があるが、さらにその前に、スコットランドでキャリアを構築する際に必要な資格体系について整理しておこう。スコットランドは先進的な資格社会で、学業に関する資格と職業訓練に関わる資格が縦横に用意されており、国内で取得できる資格能力検定のすべてのグレードはスコットランド単位・資格枠組（SCQF, Scottish Credit and Qualifications Framework）という枠組に位置付けられている。学業に関する資格は、SQAが実施するナショナル資格（National Qualifications）として体系化されている。そこでは、N（ナショナル）1からN（ナショナル、以下同じ）5、それに加えてHigher, Advanced Higherという7段階の資格が教科（コース）ごとに設定されていて、それぞれの試験において学習の到達度が測定される。S3学年（中等学校=Secondary Schoolの第3学年の意。以下同じ）またはS4学年の年、すなわち15歳から16歳で、N4またはN5の試験を受け、これが義務教育修了資格とみなされる。そこから先の進路は生徒によって異なり、そのまま就職する者、同じ中等学校で後期中等課程に進む者、カレッジで職業訓練を受ける者などに分かれる。職業訓練を受けた者は、後期中等課程を修了するときに職業訓練の到達度を測るスコットランド職業資格（Scottish Vocational Qualifications、これもSQA認定資格である）を受けてHigher（National Certificates）やHigher National Diplomasを取得して就職に生かす。大学進学をめざして後期中等課程に進んで勉強を続ける者は、S5またはS6の年に大学入学資格であるHigherまたはAdvanced Higherの試験を受ける。

3-2. 義務教育修了資格としての「音楽」

前述の資格のうち、義務教育修了時に受験を促されるのが、SQAのN4あるいはN5の試験である。中等学校の生徒は、S4学年またはその前年に得意な科目を選んでこれらを受験する。受験科目数は平均6科目だが1、2科目の生徒もいれば8、9科目受ける生徒もいる。ここで音楽を選んだ場合、次のような内容の試験を受けることになる。N5を例にとってみよう。

N5「音楽」の検定試験は以下の4つ（内容的には3つ）の部分に分かれており、それぞれはCIEの教科「音楽」の3つの教育目的に対応している。

①45分間の筆記試験…「理解」に対応…40点満点

②音楽制作課題の提出…「創造」に対応…30点満点

③楽器1の演奏…「演奏」に対応…30点満点

④楽器2または声の演奏…「演奏」に対応…30点満点

このうち③と④は実技審査で、2月または3月に審査員が各学校を訪問して実施される。全ての演奏審査に共通する条件は、適切な種目の組み合わせ、演奏時間、伴奏、楽譜の提示である。③と④で選ぶ楽器の種類や曲のジャンルには全く制限がないが、③と④の種目と演奏曲目のジャンルはできるだけ異なっていることが求められる。なぜなら、CIEそのものが、第4レベルのベンチマークとしてそれを定めているからである。演奏時間は③と④を合わせて8分になればよい。曲やジャンルによっては適切な伴奏をつけることが定められている。伴奏は教員などによる生演奏でも、あらかじめ録音されたものでもよい。また、全ての演奏は、その場で審査員に楽譜を提示して行うことになっている。スコットランドの伝統的な歌唱を選択した場合、口頭で学んだ場合でも市販の楽譜を提出して曲のあらましを審査員に提示した上で、ふさわしい装飾や解釈を加えてよいとされている。以上が共通の条件であるが、選択する楽器によってさらに細かい規定が定められている。たとえば、キーボードは両手を用いた演奏に限るとか、ドラムは様式一覧に定められたものから4つの対照的な様式を選択しなければならない、といったものである。

評価は、「旋律の正確さ/イントネーション」「リズムの正確さ」「テンポと流れ」「様式に合った雰囲気や性格」「音質」「ダイナミクス」の6つの観点から行われる（N5 musicの実施要綱による。Scottish Qualifications Authority 2017）。N5試験では得点率が40%に満たないと不合格になるため⁽⁴⁾、2種目で一定以上の成績を収められるよう、きちんと指導を受ける必要がある。生徒にN5音楽を受験させるには、演奏指導のほかに作曲指導や筆記試験対策もしなければならず、学校の音楽教員だけでは対応できないので、IMSの講師は大きな戦力なのである。また、生徒にとっても、外でレッスンを受けられる恵まれた環境にある者以外は、学校でのレッスンに頼らざるを得ない。

4. 大学入学資格試験における楽器演奏の位置付け

4-1. 大学入学に必要な条件

義務教育修了後に大学進学を目指す場合は、いくつかの科目を選択してN5の上位カテゴリー、すなわちHigherやAdvanced Higherと呼ばれるナショナル資格を取得する必要がある。スコットランドには大学（University）が15あり、それらはいずれも公立で、スコットランド在住者の授業料は無料である。大学に入学するためには、一斉に行われる選抜試験がない代わりに、中等学校在学中に取得するナショナル資格の中から各大学の各専攻が指定する種類と数を揃えなければならない。した

がって、大学で音楽を専攻しようとする場合だけでなく、音楽以外の領域を専攻する場合でも、入学資格の一つとして「音楽」のナショナル資格を取得する者は少なくない。最上位の資格である Advanced Higher（音楽）を取得して大学で音楽を専攻しようとする場合には、より高いレベルの演奏力が求められるが、IMS の講師による校内レッスンを活用することで、日本では経済的負担の大きい大学入学準備が、原則的には全て無料で可能になるのがスコットランドの教育の特長である。

前述のように、スコットランドの各大学は、それぞれ学部学科単位で入学資格として要求する資格の種類、数、成績の下限を公表しており、進学希望者はその要求に見合った資格取得に向けて準備する。たとえばエディンバラ大学音楽学科の場合、国語はN5のC以上、4科目の Higher をS5までに取得し、その成績がABBBからAAABであることなどが条件となる（イギリスの大学総合出願機関UCAS、Universities and Colleges Admissions Service の情報による。https://www.ucas.com 2020年1月31日閲覧）。つまり、音楽を専攻したい場合は音楽のHigherまたは Advance Higher で高い実力を示す必要があるだけでなく、音楽以外の科目についても4～6科目程度にわたって良い成績を収めなければならないことになる。

4-2. 大学入学資格としてのAdvanced Higher（音楽）

中等学校教育期間中に取得できる学術系最上位資格である Advanced Higherを音楽で受験する場合は、次の課題が与えられ、合計120点として採点される。それぞれの課題がCfE（音楽）の目的3本柱と対応していることはN5と同様である。

- ①45分間の筆記試験……40点満点
- ②作曲課題の提出……20点満点
- ③楽器1または声の演奏……30点満点
- ④③と対照的な楽器または声の演奏、あるいは音楽制作に関するポートフォリオの作成……30点満点

①の筆記試験は毎年4月に一斉に行われる。③④は4月27日から5月15日までの間に審査員が各学校を訪問して実施される。また、②の提出日は4月23日、④でポートフォリオを選択した場合の提出日は5月28日である（いずれも2020年の場合。ただしこの年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、実施形態に大幅な変更があった）。

Advanced Higherで求められるのはN5を発展させた内容であるが、N5と異なるのは④で、2種類の演奏に代えて演奏を1種目と創造領域を2種目にする選択肢が与えられている。これは、作曲や音楽制作の進路を志向する生徒の希望に応えるための設計であると考えられる。

以上のように、スコットランドの大学に進学する場合には複

数科目でそれ相当の資格取得が必要である。音楽を専門にしようとする場合はもちろん、そうでない場合でも「音楽」資格を取得する者が少なくなく、試験には高度な実技審査がある。それは学校でのレッスンを前提として設計されていると言ってもよく、IMSのレッスンは大学進学希望者にとって大きな助けとなっているのは間違いない。

5. 構造的矛盾とその影響

5-1. 構造的な問題—レッスンはカリキュラムの外にある

ここまでの考察から、学校教育のカリキュラムでは楽器または声の演奏ができることが目標として掲げられ、演奏力は義務教育修了資格試験や大学入学資格試験でも試されるため、事実上IMSのレッスンは前提になっていることがわかった。ところが、IMSが提供するレッスンはカリキュラムの外にある。これが「構造的矛盾」である。エビデンスを2つ引用しよう。

ひとつ目は、ISによる報告書における以下の記述である。

楽器レッスンはスコットランドの全ての自治体で提供される任意のサービスで、教室で教えられる音楽のカリキュラムからは切り離されている（Improvement Service 2019b: 5）。

ふたつ目は、2019年4月30日の教育技能委員会における議長発言である⁽⁵⁾。

楽器のレッスンと音楽教育はきちんと分けて考えなければいけません。COSLAが本委員会の報告書へのリアクションとして述べたように、P1からS3までの全ての児童生徒はBGEの一環としてスコットランド一般教育協会に登録された教員から音楽を教わります。一方、楽器レッスンは付加的なサービスで、スコットランドの全32自治体においてインストラクターにより行われています（議事録、Scottish Parliament 2019）。

以上の引用からわかるのは、カリキュラム上の「音楽」は教員（teacher）が実施する教育（education）、それに対してIMSの楽器レッスン（tuition）は指導者（instructor）が実施するサービスとみなされていることである。そしてもうひとつ考えておかなければいけないことがある。それは、CfE（カリキュラム）はナショナルレベルの決定事項であるのに対し、IMSは自治体の裁量で実施されることである。つまり、レッスンの実施自体はナショナルレベルで（事実上）要求されているにもかかわらず、レッスンの運用や料金体系の設定は完全に自治体任せになっているのである。自治体の全ての担当者が音楽に熱意があるとは限らず、レッスンはカリキュラムの外にある

ため、予算削減の対象になりやすい。その結果、人員削減によるサービスの低下、あるいはレッスン費の値上げ、あるいはその両方が起こる。

5-2. レッスン費用をめぐる議論

ここで、構造的矛盾が引き起こすレッスン費用をめぐる議論をフォローしておこう。IMSの元々の発想では、レッスン費用は無料で楽器も貸与されることになっていたため、所得に関係なくYMIからシームレスにレッスンを継続できるはずであった。実際、1990年代の初頭には有料レッスンは一般的ではなかった (Instrumental Music Group 2013: 19)。ところが1996年の自治組織再編成以降に有料化が進み、2012年には32の自治体のうち24が有料化に踏み切ったが、この時点でレッスン希望者の増加に予算が追いつかないことは明らであった。

そこでスコットランド政府は2012年12日に器楽班 (Instrumental Music Group) を結成して現状の調査を依頼し、2013年6月までに回答を求めた。器楽班は17の提言を含む報告書を予定通り提出した (Instrumental Music Group 2013)。17の提言はまず音楽の有用性を説くことから始まり、今後も自治体レベルで継続していくべきとの方向性を示したのち、現状の問題点や、運用面でも経済面でも効率を上げるためのポイントが示されている。後者の例は、地元の音楽団体との協働、補助金の申請、楽器のメンテナンスや購入時の王立音楽院との協力、YMIとの住み分けなどであるが、本稿は、構造的矛盾に関係のある次の2点に注目したい。

1つ目は、IMSのガイドライン (2003年) が2010年からの新カリキュラム (CfE) に対応していないので作成し直すようにという当然至極な指摘である。この指摘の真意は、新しいカリキュラムにおける校内レッスンの位置付けを明確にせよということであったと思われる。これに対しては、スコットランド器楽教育リーダー会議 (Heads of Instrument Teaching Scotland) が2016年に新しいガイドライン (Heads of Instrumental Teaching Scotland 2016) を作成したが、ここでは結局、CfEが目指す4つの目標と「表現芸術」領域の教育目的を達成するために、楽器のレッスンがいかに効果的かを述べるにとどまっております。レッスンがカリキュラムに含まれるのか否かという肝心なことについては触れずじまいだった。さらに料金については課金ありきで記述されており、料金体系や機会均等のための減免制度については自治体に「丸投げ」であった⁽⁶⁾。

IMG報告書 (2013) が発した、構造的矛盾に関わる2つ目の問題提起は、SQA資格試験との関係である。SQAのナショナル資格試験を受験するのに、学校の授業だけで対応している生徒もいるが、現状では多くの生徒がIMSのレッスンを利用する。そこにレッスン費が発生するわけだが、ナショナル資格の準備をするのに家庭の負担が前提とされる科目は音楽だけであり、

これは大きな問題であるとIMG報告書は指摘する。この指摘を受け、2013年からは全ての自治体においてナショナル資格を音楽で受験する生徒に対しては減免制度を適用することになったが、適用される学年や割引率は自治体によって異なる。ただ、そもそもの問題はレッスンがカリキュラムの内か外かという点にあるのは最初の指摘と同様で、カリキュラムが要求している技能や能力の到達度を測定するナショナル資格試験が、レッスンを受けることを前提として設計されていること自体が問われなければならない。

2013年のIMG報告書提出の後も、多くの自治体でレッスン費の値上げやサービスの縮小が続いた。そして冒頭のBBC報道があった2018年を迎える。新しいレッスン費が発表になる年度替わりの時期には、スコットランド中央部のクラックマナンシャー (Clackmannanshire) でレッスン費が前年の2倍になることを受けて100人の児童生徒からレッスン停止の申し出があったとの報道 (Classic FM 2018) や、レッスン費の廃止を求めて議会に1万人以上の署名が集まったとの報道 (The Telegraph 2018) があったことからわかるように、レッスンの有料化や値上げと音楽文化の衰退を憂慮する声が高まった。それが冒頭の「教育技能委員会」の動きにつながる。同委員会は、2018年11月7日、同14日、同21日、同12月5日に会合をもち、報告書を提出した (Education and Skills Committee 2019)。その報告書には「結論と提言」が26項目にわたって示されているが、ここでは「構造的矛盾」と関わる2つの項目の一部を引用したい。

音楽レッスンは任意のものかカリキュラムに含まれるのかは意見が分かれるところであると認識している。委員会としては、レッスンをカリキュラムの一部と明言することは熟慮すべきだと考える (Education and Skills Committee 2019: 15、下線は筆者による)。

レッスン講師の問題については20年以上議論が続けているが、結論はいつも同じようになってしまい、将来への突破口が見出せない。学校のカリキュラムにおけるレッスン講師の立場の明確化や、学校の教員との協働という根本的な問題に対応しなければ、音楽だけ他の授業と異なる扱いをし続けなければならない。政府やCOSLA、自治体は、この報告書に回答する際に検討してほしい (Education and Skills Committee 2019: 45、下線は筆者による)。

教育技能委員会は政府直属の委員会である。カリキュラムをいじるのはナショナルレベルの話になるため、委員会としては音楽レッスンをカリキュラムに含めず、レッスン講師の立場を明確にすることで切り抜きたいと思っているように見える。プ

レ・スクールから大学までの公教育が無償で行われている（教育法によりそれが規定されている）スコットランドで、音楽だけに費用がかかるのは大問題だが、政府は「IMSのレッスンは教育ではない」という論法でその批判をかわすのである。

その後も、レッスン費の値上げやサービス縮小に対する反対は続く。2019年4月にはアマチュア音楽家で弁護士でもある Ralph L Riddiough が、「転調しよう #changethetune」と題したキャンペーンを開始した (<https://www.crowdjustice.com/case/changethetune/>)。これは、レッスンへの課金は法律違反であるとして政府を訴えるための資金集めを目的とした、クラウドファンディングであった。また、スコットランド教育組合 (EIS, Educational Institute of Scotland) も6月から同名のキャンペーンを開始し、9月には「転調しよう - 楽器レッスンに投資せよ Change the tune: invest in instrumental music」と命名された器楽憲章 (Charter for instrumental music, Educational Institute of Scotland 2019) を提出した。この憲章は、レッスン予算の削減、指導者の減数、サービスの低下に反対し、地域や所得、障がいの有無などによる格差解消を、広く社会に訴えるものであった。

予算の出どころだけを考えれば、MISもYMIのように国家予算から特別予算を組み、自治体による裁量をやめてナショナルレベルの指導に変更することは理論上可能だが、その場合、①自治体ごとの事情、伝統、方法などが継続できなくなる恐れがある、②音楽だけ特別扱いすることになり、他の教科との整合性が取れなくなる、③CEの記述を見直す必要が出てくる、などの理由から国は消極的である。

6. むすび

以上の考察から、スコットランドの学校におけるレッスンは、カリキュラムの目的を達成するためにも、中等学校修了資格や大学入学資格を得るためにも、大きな役割を果たしていることがわかった。にもかかわらず、レッスンはカリキュラムの外に置かれ、自治体の裁量によって行われるサービスという位置付けである。この構造的矛盾は、国にも自治体にも、抜け道を提供している。財源に余裕がない自治体は、意思決定者としての立場からレッスン予算を削減し、サービスの質を落とす。その結果、レッスン費の値上げが止まらず、受講生の数は落ち込んでいる。国は、レッスンは教育ではないと言って見て見ぬふりをする。

国策であり「教育」であるYMIの無料レッスンを楽しんだ子どもたちが、経済的な理由でその先のレッスンが受けられなくなれば、その生徒は音楽に対する意欲を失い、音楽でN4やN5を受験しなくなるだろう。運良くN5（音楽）を得たとしても、その先はどうだろうか。経済的な理由でレッスンを受けて、音楽スキルを持たない生徒が増えれば、N5より上位の資格試験

で音楽を選択しない生徒が増え、高等教育機関で専門的に音楽を学ぼうとする者が減る。その結果、プロの音楽家を目指す者が減るだけでなく、生涯学習としての音楽活動が不活発になり、スコットランドの音楽文化全般が不振に陥ることは想像に難くない。子どものレッスン人口の減少は、長期的に見ると大きな問題をはらんでいる。このままでいくと、数年後にはIMSのレッスンを提供しなくなる自治体も出てくると考えられている。地域の楽団が消滅するのではないかという危惧を抱く人々もいる。それまで享受し得たものを手放す喪失感は計り知れない。今後の国と自治体の動きに、引き続き注目していきたい。

注

- (1) 2019年にはさらに2830人減少して57496人になった (Improvement Service 2019a: 20)。
- (2) 2020年現在、スコットランドは連合王国の4つのカントリーのうちの一つで、独立国家ではない。しかし歴史的に独自性が非常に強く、法制度、教育制度、裁判制度も他のカントリーと異なっているため、スコットランドはひとつの「ネーション nation」と見なされている。1999年にはスコットランド議会が設置され、実体としてもイングランドからますます距離を置くことになった。
- (3) 英国王立音楽検定 ABRSM (Associated Board of the Royal Schools of Music) は、約90ヶ国で実施され、毎年63万人以上が受検する音楽の検定試験である。グレード1のレベルは、ピアノ演奏の場合モーツァルトの《メヌエット》ハ長調 (K.6) 程度である (2020/2021年の課題曲の1曲になっている)。
- (4) N5以上のナショナル資格においては、合格だけでなくA～Dの成績がつく。N5の最低ラインであるDは得点率40～49%の分布帯に入ることが必要である。
- (5) 2019年4月30日に開催された教育技能委員会は、前年11月の委員会提言を受けてCOLSAが発行した新しいガイドラインへのリプライである。この発言は、議長であるスコットランド国民党のクレア・アダムソン Clare Adamson が開会の言葉の中で述べたもの。
- (6) 2018年11月の教育技能委員会提言を受け、2019年1月に、COSLA、スコットランド政府、MEPGは協力して自治体向けのIMS運用ガイドライン (MEPG 2019) を発行した。ここにはIMSの基本的な考え方や模範的な実践例が示されている (COSLA; Scottish Government; MEPG; 2019)。

参考文献

- ・議会・行政・政策組織発行資料
- The City of Edinburgh Council. Music lessons in school. 2019. <https://www.edinburgh.gov.uk/schools-learning/music-lessons-school?documentId=11972&categoryId=20014>
- COSLA; Scottish Government; MEPG. Instrumental music tuition: guidance to support local authorities in their decision making in relation to instrumental music tuition policies. February 2019, Edinburgh: Convention of Scottish Local Authorities. <https://www.cosla.gov.uk/music-instrumental-music-tuition-guidance-2019pdf>
- Creative Scotland. Impact report on the Youth Music Initiative 2016/17. 2017, Edinburgh: Creative Scotland. <https://www.creativescotland.com/resources/professional-resources/research/creative-scotland-research/youth-music-initiative-Impact-report-201617>
- Creative Scotland. YMI annual plan 2019-20. 2019, Edinburgh: Creative Scotland. https://www.creativescotland.com/_data/assets/pdf_file/0004/77737/YMI-Annual-Plan-Update-2019-20.pdf
- Educational Institute of Scotland. Change the tune: invest in instrumental music. September 2019, Edinburgh: Educational Institute of Scotland. <https://www.eis.org.uk/Content/images/IMT/EIS%20Music%20Charter%202018.pdf>

- Education and Skills Committee. A note of concern: the future of instrumental music tuition in schools. January 2019, Edinburgh: Education and Skills Committee.
https://www.parliament.scot/S5_Education/Reports/ES-S5-19-01.pdf
- Education Scotland (2016a). Curriculum for Excellence: expressive arts: principles and practice.
<https://education.gov.scot/Documents/expressive-arts-pp.pdf>
- Education Scotland (2016b). Curriculum for Excellence: expressive arts: experiences and outcomes.
<https://education.gov.scot/Documents/expressive-arts-eo.pdf>
- Education Scotland. Benchmarks: expressive arts. 2017.
https://education.gov.scot/nih/Documents/Expressive_Arts_Benchmarks_PDF.pdf
- Heads of Instrumental Teaching Scotland. Guidance for instrumental teaching in Scotland. May 2016, Edinburgh: Learning Directorate (Scottish Government).
<https://www.gov.scot/publications/instrumental-teaching-in-scotland-guidance-2016/>
- Improvement Service. Instrumental Music Services: results from survey, March-May 2013. Edinburgh: Improvement Service.
<https://www2.gov.scot/resource/0042/00426353.pdf>
- Improvement Service. Instrumental Music Services: summary tables 2018. Edinburgh: Improvement Service.
https://www.improvementservice.org.uk/__data/assets/pdf_file/0014/10724/ims-summary-tables-18.pdf
- Improvement Service (2019a) Instrumental Music Services: summary tables 2019. Edinburgh: Improvement Service.
https://www.improvementservice.org.uk/__data/assets/pdf_file/0015/10716/music-tuition-summary-tables-2019.pdf
- Improvement Service (2019b) Instrumental Music Services: results from the IMS survey 2019. Edinburgh: Improvement Service.
https://www.improvementservice.org.uk/__data/assets/pdf_file/0014/10715/ims-survey-report-2019.pdf
- Instrumental Music Group. Instrumental music tuition in Scotland: a report by the Scottish Government's Instrumental Music Group. June 2013, Edinburgh: Scottish Government.
<https://www2.gov.scot/resource/0042/00426360.pdf>
- Music Education Partnership Group. What's going on now?: a study of young people making music across Scotland. February 2019, Edinburgh: MEPG.
<https://www.rcs.ac.uk/wp-content/uploads/2019/02/Whats-Going-On-Now-report.pdf>
- Scottish Government. Instrumental music tuition in school: guidance for local authorities. March 2003, Edinburgh: Scottish Government.
<https://www2.gov.scot/Publications/2003/03/16937/21257>
- Scottish Parliament. Music tuition in schools. 30th April 2019, Edinburgh: Scottish Parliament.
<https://www.theyworkforyou.com/sp/?id=2019-04-30.4.0>
- Scottish Qualifications Authority. National 5 course specification: National 5 music. July 2017, Edinburgh: Scottish Qualifications Authority.
https://www.sqa.org.uk/files_ccc/MusicCourseSpecN5.pdf
- Scottish Qualifications Authority. Advanced Higher course specification: Advanced Higher music. September 2019, Edinburgh: Scottish Qualifications Authority.
https://www.sqa.org.uk/files_ccc/AHCourseSpecMusic.pdf
- ・新聞・雑誌
- BBC News, 13 November 2018, 'Drop in pupils getting music tuition in Scottish schools.'
<https://www.bbc.co.uk/news/uk-scotland-46195063>
- Classic FM, 5 June 2018, 'Parents in Scotland can't afford music lessons for their children.'
<https://www.classicfm.com/music-news/parents-afford-music-lessons-scotland/>
- The Telegraph, 13 September 2018, 'Fees forcing Scottish school children to 'hand back musical instruments.' <https://www.telegraph.co.uk/news/2018/09/13/fees-forcing-scottish-school-children-hand-back-musical-instruments/>
- Times Education Supplement Scotland (TESS), 4 May 2018, Readers' comments on 'Cuts must not stop poor pupils learning musical instruments, warns Sturgeon'.
<https://www.tes.com/news/cuts-must-not-stop-poor-pupils-learning-musical-instruments-warns-sturgeon>
- ・英語文献
- Finnerty, Adrian. Bright Red study guide: Curriculum for Excellence N5 music. 2017, Edinburgh: Bright Red Publishing.
- Moscardini, Lio. Music for All: Musical Instrument Instruction and Equity in Scotland's Schools. Policy Brief, International Public Policy Institute, University of Strathclyde, Jan. 2015, 1-7.
- ・日本語文献
- 森川 由美. 教育専門職による拡張的学習活動—スコットランドのカリキュラム改革—. 2013, 一橋大学博士学位論文.